

徳田秋声作品に見るオノマトペ — 『足跡』『黴』を中心に —

中 里 理 子*

(平成20年9月30日受付；平成20年10月31日受理)

要 旨

徳田秋声の『足跡』『黴』に見られるオノマトペの特徴について、『新世帯』、島崎藤村の『家(上)』、田山花袋の『生』と比較しながら考察した。各作品からオノマトペを抽出し、1) 心情を表すオノマトペ、2) 笑いを表すオノマトペ、3) 「見る」行為を表すオノマトペ、4) 「湿度」に関わるオノマトペ、5) その他の特徴的なオノマトペという五つの観点から検討を加えた。特徴的なオノマトペに関しては、二作品に多用されていた静寂を表すオノマトペ、偶発的動作を表すオノマトペ、所在なく歩く行為を表すオノマトペ、女性主人公に使われた独特なオノマトペを取り上げた。『足跡』『黴』は、女性主人公の描写や作品の情景描写において、オノマトペにも共通性が見られた。また、『新世帯』も含めて、秋声が人物描写においても情景描写においても、オノマトペを多用して巧みに表現していることが見て取れた。

KEY WORDS

オノマトペ onomatopoeia 心情表現 feeling expression
笑い laugh 見る行為 act to see
湿度 humidity 静寂 stillness

1. 徳田秋声のオノマトペ使用

作家によって小説中にオノマトペ¹⁾が多用されている場合とオノマトペ使用が少ない場合がある。たとえば三島由紀夫は『文章読本』の中で、「私が森鷗外に學んだのは擬音詞を節約することであります」「鷗外はこのやうな擬音詞の効果を嫌って、その文學はもっとも擬音詞の少ないものであります」と述べており²⁾、鷗外と同様、小説にオノマトペ使用を避けたことがうかがえる。一方、ここで取り上げる徳田秋声はオノマトペを多用する作家の一人であり、特に独特なオノマトペを使用することが指摘されている。松本(1970)では、「入院の一夜」という作品の一節を挙げ、「さうして得た印象をとほして対象を深く捉へ、かつ、それを直截に印象的に表現してゐるのが見てとれよう。この態度、この表現の仕様は、擬態語が多用されているところにもよく現れてゐる」と解説する。また、榎本隆司(1973)は、『黴』にある「女の顔はぼきぼきしてゐた」という箇所を解説として「秋声の用語の特色の一つになると思うが、擬態語もしくは擬声語と目されるもので、かなり多用している」と述べている。

『黴』の「女の顔はぼきぼきしてゐた」という独特なオノマトペについては、長谷川(1992)が『黴』の「文体・表現」の例として取り上げ、「独特な擬声語の使用」と指摘する。そして、倒叙法や省略ともあわせてこれらの特徴が「作品内の事象としてその意味を考察する研究は少なかつた」と述べている。秋声のオノマトペにを取り上げた研究は、確かに多くは見られない。先に見た松本(1970)では、「新世帯」を初めとする作品中のオノマトペに触れつつ、秋声の表現態度の表れの一つとして捉えていた。紅野(1991)では『爛』の比喩を分析し、「オノマトペの多用が示すように、その比喩は文がもつ統辞的で分節的な思考に対して、身体を強く喚起させ、一義性においてはとらえきれぬ包括的で曖昧さはらんだ意味を伝えようとするレトリックであつた」と指摘する。また、オノマトペを中心とした研究に木村(1973)がある。木村(1973)は、『黴』を取り上げ、作中の「擬声語の語彙」の分析から作品の印象、人物像を考察している。

本稿は、秋声のオノマトペに焦点を当てて、他の作家と比較してどのような特徴を持つのかを明らかにする。さらに、木村(1973)等、他の先行研究を参考にしながら、作品の中でのオノマトペの役割を考えていきたい。小説に見られるオノマトペの研究は古く小島孝三郎による研究がある³⁾が、その後、小説作品のオノマトペ分析が盛んに行われているとは言い難い。オノマトペという一部の語彙を取り上げることで、作家の語彙の特徴がどの程度までつか

めるのかは疑問でもあるが、少なくともオノマトペを多用している作家においては、作品中のオノマトペ使用を分析することにも意味があるのではないかと考える。

2. 調査対象とする作品

まず、徳田秋声の作品として、長編の中で代表作とされる『黴』と、その前編にあたるといわれる『足跡』⁴⁾を取り上げる。『黴』は近松秋江に「秋聲氏の作で、氏の文壇的地位が俄然として進んだのは『黴』からであったやうに思はれる」⁵⁾と評されている。『黴』のオノマトペについてはいくつかの先行研究でも取り上げられており、秋声のオノマトペを考えるには適切であると思われる。また、この二作品の内容が同系統のものであることから、内容の異なる『新世帯』を取り上げ、比較対象とする。『新世帯』は秋声が自然主義に転じて初の中編（長編と称されることもある）であり、生田長江によって「長編の圓熟したる作品としては、寧ろ『新世帯』を第一に推したい」「無技巧の技巧と云ふのはあれだらう」と高く評されている⁶⁾。三編とも新聞小説であり、『新世帯』は明治41年10月16日から12月6日まで『國民新聞』に連載、『足跡』は明治43年7月30日から11月18日まで『讀賣新聞』に連載、『黴』は明治44年8月1日から11月3日まで『東京朝日新聞』に連載された。秋声の作品の特徴を比較して考察するために、同時期の自然主義作家の作品として、島崎藤村の『家（上）』と田山花袋の『生』を取り上げる。『家（上）』は、明治43年1月1日～5月4日に『讀賣新聞』に連載、『生』は明治41年4月13日～7月19日に『讀賣新聞』に連載された。いずれも新聞小説であり、作品の分量としては『家（上）』がやや長いが『足跡』『黴』『生』とほぼ同じ長さ、『新世帯』が他作品の三分の一程度の長さである。『新世帯』『足跡』『家（上）』は『明治文學全集』（筑摩書房）所収のテキストを、『黴』『生』は『日本近代文学大系』（角川書店）所収のテキストを使用した。

3. 対象作品のオノマトペ

『新世帯』『足跡』『黴』に見られるオノマトペの語数と『家（上）』『生』のオノマトペの語数を以下に示す。抽出したオノマトペ一覧は稿末に表で示した。なお、オノマトペが非常に多く見られたため、音の象徴性を失っているようなもの、例えば、「些と」「一寸」「悉皆」「不残」「分明」「薩張」「丁と」「ちよいちよい」「ずっと」「うんと」などは数えなかった。また、表記については、「そつと」「私と」「静と」、「じつと」「ジツと」のようにひらがな・漢字・カタカナを混用しているのですべてひらがなに統一し、「じつと」「ぢつと」、「しほしほ」「しをしをし」のように同一作品内で仮名遣いが違うものがある場合は、「じつと」「しほしほ」のように当時の表記としてより一般的と思われる表記に統一した。ただし、同一作品内で表記が一つしかない場合は、「ぢつと」のようにそのまま示す。また、原文では「いらへ」のように表記されるが、本稿では原文の引用以外は、見やすさを考慮して「いらいら」のように表記する。

〈各作品に見られるオノマトペの語数〉

	足跡	黴	新世帯	家（上）	生
異なり語数	219	183	140	89	139
延べ語数	419	358	216	142	303

オノマトペの語数を見ると、秋声のオノマトペは藤村よりはるかに多く、花袋よりやや多い。『新世帯』は他作品の三分の一程度の長さであるが、オノマトペの比率は高い。秋声作品はオノマトペを多用していると言ってよいだろう。稿末の表から秋声のオノマトペの特徴を思われるものを、(1)心情を表すオノマトペ、(2)笑いを表すオノマトペ、(3)「見る」行為を表すオノマトペ、(4)「湿度」に関わるオノマトペ、(5)その他（(1)～(4)以外で多用されているオノマトペ）、に分けて見ていきたい。

4. 秋声のオノマトペ

4.1 心情を表すオノマトペ

5作品の中で見られた、心情を表すオノマトペと心情を強く暗示するオノマトペを以下に示す。（数字は用例数を示す。数字のない語は1例見られたことを示す。）

足迹	いらいら7 うきうき うんざり3 おづおづ2 おろおろ3 がっかり4 げつそり しほしほ しみじみ じれじれ すごすご4 せいせい2 そはそは2 ぞくぞく つんけん ときどき2 どきり とほとほ2 のんびり はらはら びくびく びつくり2 ひしひし ぷいと ぶつくさ ぶつぶつ3 ぷりぷり2 ぶるぶる ぶんぶん へどもど2 ぼつねん ほつと ほんやり むしゃくしゃ もちもち2 やきもき
黴	いそいそ2 いぢいぢ いらいら15 うきうき2 おどおど4 おろおろ がっかり くさくさ2 しほしほ3 しみじみ4 しんみり じれじれ すごすご せいせい4 ときどき2 とげとげ のびのび びつくり ぶすぶす ぷりぷり2 ほくほく ぼつねん まごまご4 もじもじ もだもだ2
新世帯	いらいら うつとり うんざり おづおづ4 おどおど2 おろおろ がっかり くさくさ くよくよ けろり いみじみ2 しんみり せいせい そはそは ときり どぎまぎ2 とほとほ どまどま はらはら3 びつくり2 ぶつぶつ3 ぶつくさ ぷりぷり2 ぶるぶる ぼつねん2 もやもや わくわく2
家(上)	いそいそ2 いらいら5 うんざり おづおづ がっかり しみじみ せいせい ぞーと2 ぞくぞく びくつと ぷいと ぷりぷり ぶるぶる3 ほつと2 まごまご むしゃくしゃ むつと もちもち
生	あたふた いそいそ いらいら6 ぎよつと3 くさくさ ぐづぐづ3 けんけん じりじり しをしをし しみじみ しんみり そはそは4 のんびり はつと ひしと2 びくびく びつくり7 ぶつぶつ ぷりぷり ぶるぶる まごまご むしゃくしゃ むらむら4 もちもち

心情を表すオノマトペは、『足迹』『黴』『新世帯』『生』に多く見られ、秋声と花袋の作品において特徴的であると言える。『家(上)』を含めてどの作品にも「いらいら」「ぷりぷり」「しみじみ」が使われており、他に「がっかり」「しほしほ(しをしをし)」「くさくさ」「ぶつぶつ」「むしゃくしゃ」などネガティブな心情を表す語が並んでいる。自然主義作品の人物像のイメージがうかがわれる。

例えば『黴』では、「いらいら」15例中12例が主人公笹村の気分を表すときに用いられており、ふとした拍子に不機嫌になる笹村の性格が「いらいら」という感覚的な語によって印象づけられる。『黴』のオノマトペに関しては、木村(1973)がお銀と笹村それぞれについて、「動作」「風貌・表情」「感情的・生理的気分」「その他」に分けてオノマトペを分類しているので、本稿では、『足迹』と『新世帯』について見てみたい。

『足迹』は、中丸(1994)によると、女性主人公のお庄の成長の記録であると言われる作品である。中丸は表現構造を前部(1~29)、中部(30~57)、後部(58~86)に分けている。これに従って、『足迹』のお庄の感情を表すオノマトペと感情を暗示する動作を表すオノマトペを拾い出してみた。

お庄[前部]一人できよろへしていた、自分の姿を見てぼつとしてみた、お庄はメソへしながら、尻を
もぞへさせてある、何時までも茫然してある、ほんやり見送ってゐた、とぼへとステーションを出た、
少時ほんやりしてゐた、裏通をすごへと歸って行った、お庄はニヤへしながら、心がいらへした、
とぼへと家の方へ歸って行った、お庄の頭脳をいらへさせた、じつと考へ込んでゐた
[中部]げらへ笑ひながら、じつと坐つてあられない、へどもどして奥へ駆け込んだ、胸がどきへして
みた、げらへ笑ひ出した、げらへ笑出した、ぼきへした顔をして、晴々した處、くすへ笑出した、
傍からまじへ見てゐた、くすへ笑出した、茫然眺めてゐた、うんざりして居た
[後部]じつと落ち着いてゐられなかつた、胸がいらへした、つんけんしてゐる、ぷりへする、胸がむし
やくしやして、氣をいらへさせた、家にじつとしてもゐられなかつた、ぼきへしたお庄の顔、暗い町
を悄悄とあるいてゐたが、家の荒れてゐる様子がひしへお庄の胸に、體がぞくへするほど厭であつた、
胸がどきりとした、お庄が傍ではらへするほど、お庄はへどもどして、暫く座敷に茫然してゐた、くす
へ笑つてゐた、うんざりした、そんなにびくへすることもない、嚙としたやうな目付、冷汗で體中び
つしより濡れてゐた、萎頓した體を這ふやうにして、

前部では、お庄の気持ちについて「暗い懐かしいやうな心持」「暗いやうな心持ち」「厭なやうな気がした」「厭なやうであった」など「暗い」「厭な」という表現が何度か繰り返されている。家を出て落ち着く先を探して流転するお庄の迷いや不安が、オノマトペにもよく表れている。中部では、悲劇の人物と言うべきは、病気の体で身ごもりながら死産し、自身も他界する叔母であり、お庄は一種の傍観者の立場にある。「げらげら」「くすくす」笑うお庄の姿に大きな悲哀はない。後部では、恋人の磯野をお増に奪われたお庄が意に沿わない結婚をするが、変わり者で発作的

に凶暴になる夫の元から最後にやっと逃げ出すという、お庄の不安定な状況が描かれている。全体を通して最もお庄に焦点が当てられている部分で、お庄の苛立ちや焦りや不安や恐れがオノマトベによく表れていると言える。

『新世帯』に関しては、お作、新吉、お国という主要な三人物を描写する際に使われたオノマトベを拾って比較してみる。()内は、他の人物から評価・表現されたものである。

お作 うつとり3 おづおづ4 おどおど2 かさかさ きちんと2 こてこて ごつごつ じつと2
 しよほしよほ すつと そつと4 つるつる どつと どきり とほとほ どぎまぎ2 どまどま にやり
 にやにや5 ばつたり はつと はらはら2 ひよつこり ふらふら3 ぶつぶつ ほつと ほつと
 ぼつねん ほんやり2 ぼろぼろ2 ぼつぼつ みりみり (しつかり2 びつくり ぶるぶる もざくざ)
 新吉 あくせく いらいら うつかり うつとり うとうと うんざり がぶり がんがん きつぱり くどくど
 ぐいぐい ぐつと2 くるくる ぐずぐず ぐつたり けろり ざくざく しみじみ じろり2 すばすば
 せかせか せつせ そつと3 そはそは ちびちび ちらり ついと つと てらてら につこり
 のろのろ はらはら ひよこひよこ ひよつこり ふと2 ふいと3 ぶいと ぶりぶり ぶつぶつ2
 ぶつくさ ふうふう ふかふか ふらふら ぺちやくちや ぺろぺろ ほつと ほりほり ほんほん
 もくもく もやもや わくわく2 (げらげら ほんやり2 みつちり めきめき)
 お国 うとうと おろおろ がつかり きちんと3 きゅつと きりり くつきり ぐいぐい ぐつたり
 くさくさ くよくよ しやあしやあ しんみり じつと すつと2 すばすば せいせい せつせ だらり
 ぢろぢろ2 びつくり ふいと ふつくら ぼつねん ほんほん ほんと (きちきち きちんきちんと)

お作のオノマトベを見ると、愚図で気が利かず、夫に怯えて遠慮がちなお作の心情が、「おづおづ・おどおど・どきり・どほとほ・どまどま・どぎまぎ・はっと・はらはら・ぼつねん」によって印象深く表現されている。また、「ぼろぼろ」涙を流す、うまい言葉も出ずに「にやにや」「にやりと」笑うしかない、「しよほしよほ」した目、お作が作る「ごつごつ」した煮物、周りの人から「しつかり」してくれと言われる、「もざくざ」するばかりと罵られる、というように、他のオノマトベによっても田舎者であるお作の弱い立場や心情が窺われる。お作と対照的なお国は、「きちんと・きりり・くつきり・ぐいぐい・しゃあしやあ・すばすば・せいせい・せつせ・ぢろぢろ・ほんほん」などのオノマトベによって、都会的で要領がよく、気の強い女性として描かれる。その一方で「おろおろ・がつかり・ぐつたり・くさくさ・しんみり・だらり・ぼつねん」などから、夫の小野が拘留されて気弱い立場であることも窺える。新吉は「あくせく・うんざり・がぶり・がんがん・ぐいぐい・けろり・じろり・すばすば・せかせか・せつせ・ぶいと・ぶりぶり・ぶつぶつ・ぶつくさ・もくもく」などのオノマトベに見るように、働き者で気も態度も荒く、自己本位な姿が感じられるが、「いらいら・しみじみ・そはそは・もやもや・わくわく」に見るように、お作をないがしろにしてお国との関係を持ち続けることに後ろめたさを感じるような弱い一面が浮かび上がる。

このように、『足迹』でも『新世帯』でも、オノマトベが人物の心情表現や人物描写の大きな要素となっていると考えられる。

4.2 笑いを表すオノマトベ

5作品の中で見られた、笑いを表すオノマトベと「泣く」行為を表すオノマトベを以下に示す。

足迹 えへら くすくす5 げらげら3 にこにこ2 につこり2 にやにや13 にやり2 // めそめそ3
 黴 くうくう くすりくすり げらげら にこにこ につこり8 にとり にやにや2 にやり
 // しくしく2 ほろり めそめそ ひいひい
 新世帯 げらげら につこり にやにや6 にやり // ぼろぼろ2
 家(上) くすくす にこにこ // しくしく2 ぼろぼろ わつと
 生 くすくす にこにこ13 につこり3 // ぼろぼろ2 ほろほろ3

5作品を比べると、秋声の作品に総じて笑いの描写が多いことがわかる。作品の印象としてはいずれも暗鬱な気分が漂っているのだが、泣く行為を表すオノマトベがほとんどないのに対して、笑いを表すオノマトベは種類も豊富で総数も多い。目につくのは「にやにや」「にやり」という笑いである。「にやにや」は『現代擬音語擬態語用法辞典』によると「声を立てずに連続して笑いをもらす様子を表す」が、「主体が内心の余裕・快感・侮蔑などで連続して笑いをもらす様子を表し、見る者の不可解・不快などの暗示がある」という⁷⁾。秋声の作品では、一般的な「にやにや」

笑い以外に、次に見るように、きまり悪さや照れ、所在なさなどを表し、笑うしかないような状況を示している例もある。

- ・「ぢゃ、何か欲しいものがあるなら然うお言ひなさい。姉さんお鳥目があるのよ。」「うゝん。お鳥目なんか使つちゃ不可い。」弟はニヤへ笑つた。(『足跡』二十五)
- ・「お前は、〈中略〉矢張出てお客のお酌でもするだけだ。」「え、時々……。」お庄はニヤへしながら、「矢張ね、其をしないと怒る人があるものですから。」(『足跡』二十七)
- ・其様なことが幾度も重なると、新吉は憤々して怒つた。〈中略〉お作は赤い顔をして、唯ニヤへと笑つてゐる。(『新世帯』十)
- ・「お前なぞ飼つておくより、猫の子飼つておく方が、何のくらの氣が効いてるか知れやしねえ。」〈中略〉お作は不相變ニヤへと笑つて、凝と火の起るのを瞞めてゐる。(『新世帯』十二)

また、『黴』の中で笹村が「お前も随分ひどいからな。」とお銀に言って「にやへしてゐた」箇所について、榎本隆司が『徳田秋声全集』頭注に「てれ臭さを見せながらの笑い」と解説している。これらの例を見ると、秋声の表す「にやにや」という笑いは、他に好意的な「にこにこ」という満ち足りた暖かい笑いとは異なり、照れや困惑、悲哀などを覆い隠す表情としての曖昧な笑いを表現している場合があると思われる。

中丸(1994)は『足跡』の「笑い」に触れ、作品の中部でお庄の「笑う」身体を指摘し、野川友喜が「お庄にとって、わらいは唯一の現実への批評である。時として反抗の形式でさえある。」(「お庄の笑い—足跡論のためのノート—」『風景』1961)と分析していることを述べている。『足跡』で指摘されるお庄の笑いは、3.1で見たように、作品中部の「げらげら」に見られる笑いを中心であるが、『新世帯』では、上記の例にも見るように、お作が「にやにや」「にやり」と笑う姿が印象的である。お庄やお作のような主要人物だけでなく、他の人物にも笑いは表現されており、秋声の人物描写において「笑い」は一つの要素となっているのではないだろうか。

4.3 「見る」行為を表すオノマトペ

5作品の中で見られた、「見る」「みつめる」「眺める」「目をつける」など見る行為を表すオノマトペを以下に示す。また「お銀はちらへするやうな目容をした」「河童のやうな眼をぎろへさせながら」のように「目付き」「眼の表情」を表すオノマトペを()内に示した。

足跡	きよろきよろ	じつと	しげしげ	じろじろ	14	じろり	2	ちらちら	ぼんやり	2	まじまじ	7
	(うつとり	ぐりぐり	きよろきよろ	ぎろぎろ	しほしほ	ぱちぱち)						
黴	ちらり	ちろり	じろじろ	3	じつと	2	じろり	2	(しほしほ	2	ちらちら	ちろちろ)
新世帯	じつと	2	じろり	3	ちらり	ぢろぢろ	4	(うつとり	くるくる)			
家(上)	じろじろ	3	ぢつと	(きよときよと)								
生	じつと	15	じろり	まざまざ	まじまじ							

秋声の作品と花袋の『生』には、「見る」「みつめる」「ながめる」場合にオノマトペが比較的多く使われている。藤村の『家(上)』にはオノマトペが少ないが、これは『家』に「見ること」についての描写が少ないということではない。野口(1981)では、岩野泡鳴が『家』に「四十いくつがある」という「眼付き」の描写を批判していることに触れ、そこから『黴』にも「その例はいくつも見つけ出すことができる」と述べ、「お銀は険しいやうな目色をした」以下4例を挙げている。そして「目色」という語が「まだ自然派以前の頃から、秋声の愛用語の一つだったらしい」とし、「これを要するに、眼の表情に描写の焦点を合わせるのには、秋声が早期から一貫して好んだ技法だった」と述べる。そして、「当時の自然主義文学本流がそろって標榜していた客観的描写法それ自体が、まさにその技法上の条件によって、『眼付き』の描写の多用を招来した」と指摘する。野口(1981)の指摘通り、『家(上)』では「正太は輝くやうな眼付きをして」「何もかも不平で堪へられないやうな、病人らしい、可傷しい眼付きをした」のように「目付き」の描写が多く見られるが、オノマトペを使わずに比喻や具体的な説明的表現となっている。『生』には「目付き」を表す表現はほとんど見られない。秋声の作品では、()に示したように「目付き」を表すオノマトペも何例もあり、「見る」行為自体を表すオノマトペも多い。特に「じつと・じろじろ・じろり・しげしげ・まじまじ」など、注視を表すオノマトペが目立つ。客観的描写につながるかどうかはわからないが、作中人物たちが自分の目で周りを見つめ、相手からも見られるというように、作品内に「見る」行為が基調にあることが感じられる。人物たちが「見る」行為によって心情を表したり、何かを見極めようとしていたりしていることが感じられるのである。

4.4 「湿度」に関わるオノマトベ

木村(1973)では、『黴』のオノマトベには「雨に関するもの」「しめっぽさを印象づける語」が多く、『黴』という題名から「しめっぽく不快な場面設定とが関係がある」としている。紅野(1992)では『爛』を取り上げ「テキストに散在する『水』の比喩体系」として「水そのものの諸相を示す名詞項」だけでなく、『「じめじめ」』『しつとり』『みず〜しい』といった副詞・形容詞項、「浮ぶ」「沁みる」等「心身の状態に関わる動詞項」を挙げている。そして「何よりも『爛れ』という言葉が、身体の内と外の界面における『肉』の液状化にほかならなかった」として、題名『爛』との関連を指摘する。本稿では『爛』は取り上げないが、『黴』『爛』で指摘されるように、作品世界の印象を伝えるものとしてこれらのオノマトベが使われているのかどうかを検証したい。以下、5作品の中で見られた「湿度」や「湿り気」に関わるオノマトベを挙げる。「雨がしぶ〜降つて」のように雨の降る様子や「冷汗で體中びつしよりして」のように汗などで濡れる様子も加えた。また「ぢやぶぢやぶ手拭で顔を洗つた」のように水に関するものは()で示した。

足跡	ぐつしより	ざあざあ	しつとり4	じつとり	しぶりしぶり	しめしめ	じめじめ3	ばしばし
	びしよびしよ	びつしより2						
黴	ざあざあ	しとしと4	しつとり	しぶしぶ2	しよほしよほ	じめじめ10	どんより	びしよびしよ2
	べとべと2	べつとり	ほそほそ	ぽつりぽつり				
新世帯	〈なし〉							
家(上)	ざあと	じめじめ	だらだら	びつしより	(じやぶじやぶ)			
生	ざぶざぶ	しつとり2	じめじめ	しとしと	しとどに3	しよほしよほ	びつしより	(ざぶざぶ4 ぢやぶぢやぶ)

5作品のなかでは、『黴』に見られるオノマトベが群を抜いて多く、木村(1973)の指摘にある通り、しめった不快な印象をオノマトベを通して与えていると言える。『足跡』は『黴』の前編に当たる作品であるが、雨の場面が多いことや、「ジメ〜した庭」「汚い地面はまだ^{しつと}湿りして」のように辺りの情景描写にも湿度のある表現をしていることによって、この系統のオノマトベが多くなっている。それに対して、『新世帯』には湿度に関するオノマトベが一例も見られなかった。『新世帯』は、『足跡』『黴』とは登場人物のモデルも異なり、作品の背景も異なっている。『新世帯』は、湿度の高い不快な情景を必要としてはおらず、それがオノマトベにも反映されているのであろう。一方の『足跡』『黴』は女性主人公が同じモデルとされており、湿った空気の漂う情景、湿った陰鬱な気分という作品の印象にも連続性があることが、オノマトベを通して伝わってくる。『黴』では、特に以下のような表現が何度も表れ、湿り気が多い陰鬱な情景が印象づけられる。

- ・裏には匏眉などが、雨に濡れて石炭殻を敷いた^{じめじめ}湿々する地面に粘り着いてゐた。(『黴』二)
- ・外はざあ〜雨が降つて、家のなかもじめ〜してゐた。(『黴』十四)
- ・井戸の遠いことや、壘のじめ〜する茶の間の陰氣くさいことが(『黴』四十三)
- ・じめ〜した秋の雨が長く續いて、崖際の茶の室や、玄關脇の長四壘のべと〜する壘觸が、いかにも辛氣くさかつた。(『黴』五十六)

『黴』では、秋声が意識的にこの系統のオノマトベを多用していたのではないかと思われる。『黴』の前編とされる『足跡』にも、以下のような表現が見られる。

- ・〈前略〉父親が、いきなり起上ると、子供の着物や母親の襦袢のやうな物を、両手で掻浚つて、ジメ〜した庭へ捏ねて投出した。(『足跡』六)
- ・紙片、萇の吸殻などの落散つた汚い地面はまだ^{しつと}湿りして、木立や他獲物に淡い濛霧がかゝり、(『足跡』十一)
- ・じめ〜した汐風に、尺八の音のふるへが夢のやうに通つて来て(『足跡』三十四)
- ・お庄はじめ〜した物置の蔭に積んである薪に體を凭せてゐながら(『足跡』七十八)

『黴』に比べると湿度の印象は強くはないが、作品に流れる空気が湿り気あるものであるという印象を残している。また、「馬車のなかは、水のやうな風がすい〜吹通つた(『足跡』二十四)」のように水のイメージが表れており、紅野(1992)で『爛』について「テキストに散在する『水』の比喩体系」が指摘されていることにつながっている。『足跡』以降の長編に同じような水のイメージ、湿度の高い表現が見られるのかどうかについては、今後調査してみたい。

4.5 その他の特徴的なオノマトペ

4.5.1 多用されたオノマトペ

『足跡』『徴』で、先の四項目以外に多用されていたオノマトペを見ていきたい。傾向としては、静けさを表す語（しんと、そつと、ひそひそ等）、偶発的動作を表す語（ふと等）、所在なく歩いたりする様子を表す語（ぶらぶら等）が多かった。以下にそれらのオノマトペを挙げる。

足跡	しんと4	そつと18	ひそひそ2	ひつそり9	ふと4	ふつと	ふいと2	ふらふら3	ぶらぶら13
									ぶらりと4
徴	しんと4	そつと6	ひそひそ	ひつそり3	ふと21	ふつと3	ふいと3	ぶらぶら18	ぶらりと3
新世帯	しんと2	そつと7	ひつそ	ひつそり	ふと2	ふいと4	ふらふら	ぶらりと	
家(上)	しんと	ふと7	ぶらぶら2	ぶらりと2					
生	そつと4	ふと29	ふつと	ふいと4	ぶらぶら				

『家(上)』『生』と比較すると、秋声の作品では静けさを表すオノマトペが多く見られることがわかる。秋声の作品からいくつか例を見たい。

- ・〈前略〉がた人力車の音が耳につくくらゐ其處らが暗くシンとしてゐた。 (『足跡』二)
- ・歸つて行くと、奥はもうひっそりしてゐた。 (『足跡』二十三)
- ・下宿は昼間もシンとしてゐた。 (『徴』二十三)
- ・家へ歸ると、小さい家のなかひっそりはひっそりしてゐた。 (『徴』二十六)
- ・後は少時しんとして、蒼い苺の煙が、人々の目の前を漂うた。 (『新世帯』六)
- ・店も奥も漸くひっそりして來た。 (『新世帯』二十一)

『新世帯』では例も少なく、全体の雰囲気として静けさが印象に残るほどのことはないが、『足跡』『徴』では、「しんと」「ひつそり」が随所に効果的に使われている。静まりかえった家や辺りの様子に、賑やかな明るさとは対照的な暗い静けさ、物寂しさが感じられる。これらに対して「そつと」は『新世帯』でも多用されている。三作品の例を見たい。

- ・女は夜更けてから梯子をさして、そつ私と二階の主の部屋の戸を敲いたが、 (『足跡』五十九)
- ・〈前略〉笹村は赤子を抱いて、そつ私と裏へ出て見た。 (『徴』二十八)
- ・[お作が] 私と上つて見ると、新吉は長火鉢の處に立膝して苺を吸つてゐた。([]内は筆者注。以下同じ。) (『新世帯』三十七)

作中人物が、時に辺りにはばかりのように時に相手に遠慮するように、音も立てずに行動する様子は、作品に漂う陰鬱で静かな雰囲気によく合っている。これらのオノマトペの醸し出す静けさは秋声作品に独特の雰囲気なのではないだろうか。

なお、『生』では、「こっそり」が多く見られた。(「こそこそ」1例,「こつそり」8例。)例えば、「銚之助は初めは母に見せまいと思つて〈中略〉こつそり兄の机の抽斗に入れて置いてやつた」「二階の階梯をこつそりと上る微かな足音がする」のように使われているが、人物描写の特徴として考えることができるだろう。

次に、「ふと」「ふつと」「ふいと」という、偶発的動作を表す語について見てみたい。根岸(1982)では『あらくれ』を取り上げ、「受動的な境遇や生活意識に生きる人物主体」が受ける外界の刺激が「受動的な、偶然の契機によって」成り立つとして、その契機を示す語の例に「ふと」「どうかすると」を挙げている。本稿で取り上げた三作品では、作中人物がふと何かを思い立つ、ふと何かに気づくという、無意識の気分のままに行動する様子が、「ふと」「ふつと」に表されているように思われる。

- ・父親は、その姿を見ると、煙草入を腰にさして、ふいと表へ出て行つた。 (『足跡』十四)
- ・〈前略〉洋服姿の男が、ふと[お庄の]目についた。 (『足跡』七十七)
- ・[笹村は]ふと思ひついて、女のために肩掛を一つ買つて戻つた。 (『徴』十九)
- ・〈前略〉笹村はふと思出したやうに家の方へ行つて見た。 (『徴』三十三)
- ・新吉はフイと側へ寄つて、お作の頬に熱いキスをする事などもある。ふと思ひついて、近所の寄席へ連出す事もあつた。 (『新世帯』十五)

「ふと」等で表されるイメージは秋声独特のものではなく、花袋の『生』では「ふと」29例、「ふつと」1例、「ふ

いと」4例が見られた。花袋の作品においても特徴的なオノマトベと言える。

- ・ふとある不愉快な思が銚之助の胸を衝いた。 (『生』十三)
- ・〈前略〉大きなお世話だといふ腹になつて、ファイと向ふに行つて了ふ。 (『生』三十五)
- ・秀雄はふと立つて傍の手提の中を探した。 (『生』五十)
- ・ふと主人が気が附くと、お桂は済して膳に向つて (『生』七十四)

これらの例にも見るように、『生』の中では、ある思いが兆したりあることに気づいたりする場面が多く現れる。作中人物たちがその時々感情のままに動いている姿として印象に残る。その様子を「受動的」と表現することもできるかもしれない。根岸(1982)で秋声の『あらくれ』に対して評したことが、同じく自然主義文学作品である『生』にも当てはまっていると言える。

最後に、「ぶらぶら」「ぶらりと」「ふらふら」というオノマトベについて見てみたい。他の二作品に比べて秋声の作品に多く見られる語である。

- ・お庄は泣出す小さい子を負出すと、〈中略〉狭い庭をぶらへしながら家の様子を見てゐた。 (『足迹』六)
- ・お庄は空腹を抱へながら、公園裏の通をぶらへ歩いたり、静な細い路次のやうな處にイんで〈中略〉何時までも茫然してゐることが度々あつた。 (『足迹』十)
- ・春の末に郊外の或町へ片着いて行くまで、お庄は家にぶらへしてゐた。 (『足迹』六十八)
- ・[お銀が] 笹村に逐出されるやうにして、そこまで来て彷徨してゐたこともあつた。 (『徴』十一)
- ・少し許の金を袂の底に押込んで、笹村は町をぶらへ歩いてゐた。 (『徴』二十六)
- ・そこを出てから、二人はぶらへ須田町のあたりまで歩いた。 (『徴』六十一)
- ・〈前略〉差當り何處へ行くと云ふ的もない。お作は唯フラへと歩いた。 (『新世帯』三十五)

『足迹』では、特にお庄が所在なくあてどもなく歩いたり行き場もなく家にいたりする様子が、「ぶらぶら」という語で何度も表現されており、お庄の落ち着かない状況や立場が「ぶらぶら」というオノマトベによって印象づけられる。『新世帯』の「ふらふら」の例も、お作が居場所もなくあてどもなくさまよう様子が効果的に表されている。『足迹』には「ぶらぶら」が13例あったが、『徴』には18例とさらに多く見られた。『徴』では『足迹』のお庄のような所在なさはあまり見られないが、作中人物たちが折に触れてなんということもなく歩き回る様子が描かれている。ここには先の「ふと」「ふっと」で見た、無意識のうちに行動する姿が重ねられ、市井の人間の日常の姿がそのまま描かれているような印象を受ける。秋声の他の作品にも多用されていれば、秋声が人物を描く特徴の一つと考えることができるだろう。

4.5.2 人物描写

すでに4.1で『足迹』のお庄の人物描写について、心情表現の面から考察した。ここでは補足として、お庄に特徴的に見られたオノマトベ「べつたり」「ぼきぼき」について簡単に触れておきたい。

- ・お庄はお鳥の寝所の傍にべつたり坐つて、額を抑へながら深い溜息を吐いた。 (『足迹』二十三)
- ・お庄はその入口に膝を崩して、べつたり坐つた。 (『足迹』四十六)
- ・お庄はべつたり體を崩して、何時までも聴耽つてゐた。 (『足迹』五十二)
- ・突伏しになつてゐたお庄は、懈い體を崩して、べつたりと坐りながら、大い手で顔を撫でたり、腕を擦つたりしてゐた。 (『足迹』八十四)

「べつたり」という語は『足迹』6例中4例がお庄が体を崩して座る表現として使われている。他に座る表現として使われたのは次の1例である。

- ・年増の方の女は、そこにべつたり坐つてゐた。 (『足迹』七十二)

「べつたり」はこの例に見るように、尻の重いだらしな姿勢を思い浮かべる表現である。この「べつたり」というオノマトベが若いお庄に使われた場合、お庄のやや放心した表情と肉感的な姿勢として印象づけられる。これは、続編とされる『徴』のお銀の姿としても描かれている。

- ・お銀は二疊の茶の間で、不亂次な姿で、べつたり疊に粘着いて眠つてゐた。 (『徴』六)
- ・女は意外のやうに、そこへべつたり坐つて額に手を當て考へ込んだ。 (『徴』十一)

- ・お銀は引越の日に、色々のもの、取出された押入の前にべつたり坐つて、思の深さうに言出した。(『黴』四十)
- ・^{とたん}亜鉛の板敷にべつたり坐つてゐるお銀は、少しづつ、性がついて來た。(『黴』七十八)

『黴』で見られた「べつたり」は4例ともお銀の座る様子、横たわる様子に使われている。『足跡』の例と同じく、「べつたり」というオノマトペによってお銀の放心した表情と肉感的な姿態が描かれていることがわかる。お銀の人物描写は、前編であるお庄の描写をそのまま引き継いでおり、読者も同じイメージを抱いてお銀を思い描くことになる。これは、秋声独特のオノマトペとされる「ぼきぼき」も同様である。『足跡』ではお庄の表情を表した例が2例ある。

- ・お庄は浴衣に着換へながら、ぼきへした顔をして、紅入メリンスの帯を締めてゐた。(『足跡』四十二)
- ・従姉はぼきへしたお庄の顔を眺めた。(『足跡』七十四)

「ぼきぼき」をどう解釈するかは、内容の解釈と関わることなので本稿では触れないこととする。ここでは、同じ表現が『黴』のお銀にもされていることを指摘しておきたい。

- ・〈前略〉揉上の心持長い女の顔はぼきぼきしてゐた。(『黴』三)

『黴』のお銀が『足跡』のお庄であることが、「ぼきぼき」という独特なオノマトペによっても強く印象づけられるのである。

5. まとめ

以上、秋声の作品に見られるオノマトペの特徴について、人物描写に関わるものと情景描写に関わるものを検討した。人物描写に関しては、心情を表すもの、笑いを表すもの、「見る」行為を表すもの、偶発的動作を表すもの、所在なく歩く行為を表すもの、女性主人公を表す独特なオノマトペについて考察し、情景描写に関しては、「湿度」に関わるもの、静寂を表すものを取り上げて考察した。『足跡』『黴』は、女性主人公とすべきお庄とお銀が同一モデルとされており、作品の情景・雰囲気も類似しているが、オノマトペによっても、お庄とお銀の描写の共通性、湿った情景や静かな雰囲気の詳細という共通性があった。また、『新世帯』では、お作と新吉、お国のオノマトペがそれぞれの個性によって使い分けられていた。三作品に共通して、笑いのオノマトペ、「見る」行為を表すオノマトペ、偶発的動作や所在なく歩く行為を表すオノマトペが多く見られ、秋声の作品に見られるオノマトペの特徴であると考えられる。以上の考察を通して、オノマトペを多用する秋声の作品では、オノマトペによって人物の特徴が印象的に表されていることが見て取れた。生田長江は、秋声が人物描写に優れていることについて、「『新世帯』のお作や、お国や、新吉や、『足跡』より『黴』へかけての、十数人の老若男女の、きびきびした印象は云ふまでもない事だ」「性格の描きにくい短篇物の場合に於てすら、個々の人物が随分鮮かにかき分けられてゐる」「とりわけ氏は、女性の描写を得意として居るやうに思はれる」と指摘する⁸⁾。秋声が人物を巧みに描き出し、巧みに描き分けていることは、人物のオノマトペを巧みに使い分けていることにも通じていると言える。

以上

【資料】

以下、(1)~(5)に各作品に見られたオノマトペを挙げる。オノマトペとしての音象徴性が薄れ、一般語化していると思われる次の語は数えなかった。

(うんと・さつぱり(「~ない」と呼応する場合)・すつかり・ずつと・そつくり・そろそろ(時間的な意味の場合))
(ちと・ちよつと・ちゃんと・ちょいちょい・どんどん)

また、「ありあり」「ほれほれ」などの疊語は含めないが、「しみじみ」「つくづく」はオノマトペとする辞典もあり、心情を表す語としてオノマトペのうちに含めた。表記は見やすいようにすべてひらがな表記に統一し、また踊り字(へ)表記を避けて示した。

(1) 『足迹』に見られるオノマトペ

いらいら7 うきうき うそうそ うつかり うつとり2 うとうと3 うようよ うろうろ うんざり3
 えっちらおっちら えへら おづおづ2 おろおろ2 がくがく2 かさかさ2 がたがた かちかち がちがち
 がちやがちや かつと かつかと がつかり4 がつしり がみがみ かんかん きちんと2 きつぱり
 きよろきよろ3 きよときよと2 きらきら ぎろぎろ ぐいぐい く, く, く くしゃくしゃ くすくす5
 ぐつしより ぐつすり ぐつたり3 ぐづりぐづり くどくど ぐらり ぐりぐり ぐるぐる2 ぐんぐん
 げつそり げらげら3 こくりこくり2 ごしごし2 こそこそ2 ごたごた5 こちこち ごちごち
 ごつちや ごちやごちや5 こつこつ ごつごつ こてこて4 こまこま ごりごり ころころ ごろごろ3
 ごろり2 ざあざあ さつさ ざらざら2 ざわざわ しげしげ じつと7 しつかり しつくり しつとり4
 じつとり しねしね しほしほ しみじみ しめしめ じめじめ3 じれじれ じろじろ14 じろり2
 じわじわ しんと4 すいと すいすい すうすう すかすか すごすご4 すたすた すっと すばすば
 ずるずる すんなり せいせい2 せつせと3 ぞくぞく そそくさ そつと18 そつくり そはそは2
 ぞろぞろ5 たつぷり だぶだぶ だらだら ちくちく ちぐはぐ ちびちび5 ちやらちやら ちやほや
 ちょこちょこ2 ちよろり ちよんびり ちらと2 ちらほら5 ちらちら5 つくづく2 づけづけ づつと
 づらり2 つるつる3 づるづる つんけん づんづん でこでこ でつぷり てらてら2 どかどか どころ
 どきり ときどき2 どたばた とほとほ2 とんとん にこにこ2 につこり2 にちやにちや にやにや13
 にやり2 ぬつと のこのこ のそのそ2 のつそり のつぺり2 のろのろ3 のんびり ぱとと ぱしぱし
 はたはた ばたばた3 ばたばた ぱつたり2 ぱちぱち2 ぱちりぱちり ぱつぱと はらはら ぴいぴい
 びくびく ひこひこ ひしひし びしびし びしよびしよ ひたひた ぴたぴた びつくり2 ぴしやん
 びつしより2 ひそひそ2 ひつそり9 ひつたり びつたり びたり ひらひら ふと4 ふつと ふいと2
 ぶいと2 ふかふか ぶつくさ ぶつぶつ3 ふつつり ぶよぶよ ぶらぶら13 ぶらり4 ふらふら3
 ぶりぶり2 ぶるぶる ふわふわ ぶんぶん べたり べつたり6 べつたり へどもど2 ぺろり べろべろ
 べんべこ ほかほか ぼきぼき2 ぼくりと ほとと ほとほと2 ほとねん2 ぼりぼり ほとりほとり
 ほんと ほんのり まじまじ7 みつちり むしやくしや むつちり むつと めそめそ3 めきめき
 めつきり2 もがもが もくもく もぞくさ もぞもぞ もちもち やきもき ゆつくら

(2) 『徴』に見られるオノマトペ

いそいそ2 いらいら15 いぢいぢ うきうき2 うつかり3 うつらうつら うとうと3 うろうろ おちおち
 おどおど4 おろおろ かあつと がくがく かさかさ がさがさ かちかち かつと がつかり がつくり
 がらがら がらんと かんかん ぎくぎく ぎこぎこ きちきち きちんと3 ぎつしり きびきび きらきら
 きりり くうくう くさくさ2 くしゃくしゃ くすりくすり ぐつたり4 ぐでぐで2 ぐんぐん くらくら
 ぐらぐら くるくる ぐるぐる げらげら ごーごー ごたごた3 こちやこちや2 こてこて こつてり
 こまこま2 ごみごみ ごりごり ころころ ごろごろ こんもり ざあざあ さえざえ3 さくさく ざらざら
 ざわざわ2 しくしく2 じつと7 しつかり しつとり しとしと4 しぶしぶ3 しほしほ3 しみじみ4
 じめじめ10 しよほしよほ しらしら じりじり じれじれ じろじろ3 じろり2 しんと4 しんみり
 すいすい すごすご すやすや2 すらり するする ずるずる ずんずん すんなり せいせい6 せつせ
 そつと6 ぞべぞべ そより そろそろ たつぷり たらたら2 ちかちか2 ちぐはぐ2 ちびちび2
 ちびりちびり2 ちやらちやらん ちらりと2 ちらちら3 ちらほら2 ちろり ちろり ちろちろ3
 ちんちん づつと2 つやつや つるつる2 づるり づんづん でくでく でこぼこ どーつ ときどき2
 とげとげ どつさり どんより にこにこ につこり8 にとり にやにや2 にやり ねとねと のこのこ
 のつぺり のびのび のろのろ ばさばさ ばたばた4 ばたんと ばちやばちや ひいひい ぴかぴか
 ぴしやり ぴしやん びしよびしよ2 ひそひそ ぴたぴた びたり びつくり ひつそり3 ひやひや3
 ひよこひよこ2 ふと21 ふいと3 ふつと3 ふかふか2 ぶすぶす ふつくら ふらふら ぶらぶら18
 ぶらり ぶらり3 ぶりぶり2 べつたり4 べつとり べとべと2 ぼーつ2 ぼかん ぼきぼき ぼくぼく
 ぼそぼそ2 ほとと ほとと ほとかり ほとねん ほとほと4 ほとほと3 ほとりほとり ほとりと
 ほろり ほんやり5 まぎまぎ まじまじ まごまご4 むくむく めつきり3 めそめそ もがもが もじもじ
 もだもだ2 もちもち ゆつたり よちよち2 よろよろ

(3) 『新世帯』に見られるオノマトペ

あくせく あやふや いらいら うっかり うっとり4 うとうと2 うんざり おづおづ4 おどおど2
 おろおろ かさかさ がつかり がぶり かんかん がんがん きちきち きちんと6 きつぱり きゆつ
 きりり ぐいぐい2 くさくさ ぐずぐず ぐたくた ぐつと2 くつきり くどくど2 ぐつたり2 くよくよ
 くるくる2 けそり げらげら けろり こくりこくり ごたごた2 ごつごつ こつくり こてこて2
 こなこな ごぼごぼ こまこま2 ごろごろ こんもり ざくざく さっさ ざわざわ じいじい じつと3
 しっかり2 しみじみ2 しやあしやあ しゆつしゆつ しよほしよほ じろり3 じろじろ4 しんみり
 しんと2 すくすく すつと3 すばすば2 ずるずるべつたり せいせい せかせか2 せつせと2 そつと7
 そはそは だらり だらだら ちびちび ちらりと ちらほら2 ちんまり つと ついと つかつか つくづく
 つやつや づらり つるつる てらてら2 てきばき2 どぎまぎ2 どきり どつと とほとほと どもども
 どやどや につこり にやにや6 にやり のろのろ はたはた ばたばた ばつたり はつと はらはら3
 びつくり2 ひらひら ひつそ ひつそり ひよっこり2 ひよこひよこ ひよろり ふと2 ふいと4
 ぶいと ふうふう ふかふか2 ぶつくさ ふつくら ぶつぶつ3 ぶらり ぶりぶり2 ぶるぶる ふらふら4
 ぺちゃくちゃ ぺらぺら ぺろぺろ ほくほく ほつと ほつ2 ぼちゃぼちゃ ぼつねん2 とほとほと
 ほかほか ぼつぼつ ぼりぼり ぼろぼろ2 ぼんと ぼんぼん2 ほんやり5 みつちり みりみり むっくり
 めきめき もくもく もぎくさ もやもや ゆっくり2 わくわく2

(4) 藤村『家(上)』に見られるオノマトペ

いそいそ2 いらいら5 うかうか うつすら うねうね うんざり おづおづ がつかり がたがた がたり
 かちやかちや がぶがぶ がらんと きよときよと ぎらぎら くすくす ぐずぐず くらくら ぐるぐる
 こそこそ ごたごた2 ごちやごちや ごつとん, ごつとん2 ごてごて こんこん ぎあと さえぎえ
 ぎつと さつさと しくしく2 じつと4 しつかり4 しみじみ じめじめ じゃぶじゃぶ しょんぼり4
 じろじろ3 しんと しんかん すたすた すっかり2 すばすば ずんずん4 せいせい せかせか ぞーと2
 ぞくぞく そろそろ だくんだくんだ だらだら ちつと5 ちびりちびり ちやつと2 ちよちよち ちらちら
 ちりんちりんちりんちりん つと2 つくづく2 つやつや にこにこ ばつたり びくつと びつしより
 ひやひやと3 ひよいひよいひよいひよい ぶいと2 ふと7 ふうふう2 ぶらぶら2 ぶらりと2 ぶりぶり
 ぶるぶる3 ホイーンーポーンー ぼたぼた ほつと2 ほつほつ2 ぼろぼろ ほんやり まごまご
 みしりみしり むしやくしや むつと むつくと もぢもぢ ゆつくり7 よろよろ りんと わつと わんと

(5) 花袋『生』に見られるオノマトペ

あたふた あべこべ3 いざこざ5 いそいそ いらいら6 うとうと3 がさがさ4 がさごさ がたがた2
 がたびし がたんがたん がつくり がらがら4 がらん がわうがわう かんかん2 ぎいと ぎいぎい
 きうと きつと きやつきやつ ぎよつと3 きよろり きらきら5 くすくす ぐつと3 くつきり2
 くさくさ ぐづぐづ3 くどくど2 ぐんぐん2 ぐるり ぐつすり ぐたり けんけん ここと2 こそこそ
 ごたごた8 こつそり8 ごてごて こんもり2 さくさく さつさと ぎつと ぎぶぎぶ4 じつと15
 しつかり2 しつとり2 しとどに3 しとしと しみじみ じめじめ しやあしやあ しやんと
 しやんしやんしやん しよほしよほ じりじり しをしを じろり しんみり すいすい すうと すつきり
 すらつと ずらり2 すやすや2 するする ずんずん そそくさ2 そつと4 そはそは4 だくだく2
 だらだら2 だらり2 ちくちく4 ぢやぶぢやぶ ぢやらぢやら3 ぢやほや ぢよろぢよろ ちらちら
 づかづか2 つけつけ3 つくづく つやつや てかてか てくてく2 でこぼこ てつきり とどろに
 ドン, ドコ, ドンドコドン とんと にこにこ13 につこり3 のんびり はつと ばたばた5 ばたばた
 ばつちり はらはら ひーひー びくびく ひしと2 びつくり7 びしやり びつしより ひらひら ふと29
 ふいと4 ふつと ふうふう ぶつぶつ ぶらぶら ぶりぶり ぶるぶる べたべた3 べつたり べちやくちや
 べちやんこ ほしい ぼつと ぼつくり ぼつそり ぼつくり ぼりぼり ぼろぼろ3 ぼろぼろ ぼろぼろ2
 ほんのり ほんやり7 まごまご まぎまぎ2 まじまじ むしやくしや むらむら4 めちやめちや2
 もぐもぐ もぢもぢ ゆつくり わあーつわあーつ

【注】

- 1) 擬音語・擬態語の総称として用いる。
- 2) 三島由紀夫『文章読本』中央公論社 1959年
- 3) 小嶋孝三郎1972『現代文学とオノマトペ』桜楓社
- 4) 『讀賣新聞』連載時は『足跡』, のち出版されて『足跡』と表記されている。
- 5) 「人及び藝術家としての徳田秋聲氏」1921年(大正10)『人間』(明治文學全集68巻『徳田秋聲集』所収)
- 6) 「徳田秋聲氏を論ず」1911年(明治44)『新潮』(明治文學全集68巻『徳田秋聲集』所収)
- 7) 飛田良文・浅田秀子『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002年 東京堂出版) p 353「にやにや(っ)」の項。
- 8) 注6に同じ。

【引用・参考文献】

- 榎本隆司 1973 「徳田秋聲集注釈」『徳田秋聲集』(日本近代文学大系)角川書店
- 木村東吉 1973 「『徴』の構造—擬声語の語彙の研究を通して—」『国文学攷』(広島文理科大学国語国文学会) 61号
- 木村東吉 1974 「『徴』の構造—“無技巧無解決”の根底にあるもの—」『国文学攷』(広島文理科大学国語国文学会) 64号
- 紅野謙介 1991 「身体, 比喩, レトリック—徳田秋声『爛』を中心に—」『日本近代文学』45号
- 高橋敏哉 2006 「徳田秋声『徴』論—その表現意識をめぐって—」『論究日本文学』84号(立命館大学日本文学会)
- 中丸宣明 1994 「お庄の『成長あるいは成長する『語り』』」『国文学解釈と鑑賞』59巻4号
- 中丸宣明 1994 「徳田秋声『徴』—転義の様相あるいはダブル・トゥループス」『国文学解釈と教材の研究』39巻7号
- 中丸宣明 1995 「徳田秋声, その長編小説の作法テキスト—『徴』の生成—」『日本近代文学』53号
- 野口武彦 1981 「『鋭敏なる描写』の文法—徳田秋声の小説文体をめぐって」『海』13巻8号(中央公論社)
- 根岸正純 1982 「徳田秋声の文体—『あらくれ』を中心に—」『岐阜大学国語国文学』15号
- 長谷川達哉 1992 「徳田秋声『徴』」『国文学解釈と鑑賞』57巻4号
- 松本徹 1983 「徳田秋声の写実—『新世帯』を中心に—」『近畿大学教養部研究紀要』15巻1号

Onomatopoeia in the Novels of Tokuda Syusei

— Around 'Asiato' and 'Kabi' —

Michiko NAKAZATO *

ABSTRACT

It was examined with comparing it with 'Arajyotai', Shimazaki Toson's 'Ie (the first half)' and Tayama Katai's 'Sei' about the characteristics of the onomatopoeia seen in 'Asiato' and 'Kabi' of Tokuda syusei.

Onomatopoeia was extracted from each novel, and an examination was added from the following five viewpoints.

1) the expressin of feeling, 2) laugh, 3) "act to see and look", 4) "humidity", 5) others.

Other onomatopoeia was examined from the next four points. Those are the onomatopoeia which shows stillness, the onomatopoeia of seeing by chance, the onomatopoeia of aimless walking and heroine's unique onomatopoeia.

Onomatopoeia had commonness about the heroine's description and the scene description in 'Asiato' and 'Kabi'.

Investigating three novels of 'Asiato', 'Kabi' and 'Arajyotai', it was found that Syusei used onomatopoeia skillfully in description of a character and scene description.